〔C 年〕降誕前節第７主日(2026 年 11 月 8 日)

【旧約聖書日課】創世記　18章1～15節

1主はマムレの樫の木の所でアブラハムに現れた。暑い真昼に、アブラハムは天幕の入り口に座っていた。2目を上げて見ると、三人の人が彼に向かって立っていた。アブラハムはすぐに天幕の入り口から走り出て迎え、地にひれ伏して、3言った。

「お客様、よろしければ、どうか、僕のもとを通り過ぎないでください。4水を少々持って来させますから、足を洗って、木陰でどうぞひと休みなさってください。5何か召し上がるものを調えますので、疲れをいやしてから、お出かけください。せっかく、僕の所の近くをお通りになったのですから。」

その人たちは言った。

「では、お言葉どおりにしましょう。」

6アブラハムは急いで天幕に戻り、サラのところに来て言った。

「早く、上等の小麦粉を三セアほどこねて、パン菓子をこしらえなさい。」

7アブラハムは牛の群れのところへ走って行き、柔らかくておいしそうな子牛を選び、召し使いに渡し、急いで料理させた。8アブラハムは、凝乳、乳、出来立ての子牛の料理などを運び、彼らの前に並べた。そして、彼らが木陰で食事をしている間、そばに立って給仕をした。

9彼らはアブラハムに尋ねた。

「あなたの妻のサラはどこにいますか。」

「はい、天幕の中におります」とアブラハムが答えると、10彼らの一人が言った。

「わたしは来年の今ごろ、必ずここにまた来ますが、そのころには、あなたの妻のサラに男の子が生まれているでしょう。」サラは、すぐ後ろの天幕の入り口で聞いていた。11アブラハムもサラも多くの日を重ねて老人になっており、しかもサラは月のものがとうになくなっていた。12サラはひそかに笑った。自分は年をとり、もはや楽しみがあるはずもなし、主人も年老いているのに、と思ったのである。

13主はアブラハムに言われた。

「なぜサラは笑ったのか。なぜ年をとった自分に子供が生まれるはずがないと思ったのだ。14主に不可能なことがあろうか。来年の今ごろ、わたしはここに戻ってくる。そのころ、サラには必ず男の子が生まれている。」15サラは恐ろしくなり、打ち消して言った。「わたしは笑いませんでした。」

主は言われた。「いや、あなたは確かに笑った。」

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙　9章1～9節

1わたしはキリストに結ばれた者として真実を語り、偽りは言わない。わたしの良心も聖霊によって証ししていることですが、2わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります。3わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています。4彼らはイスラエルの民です。神の子としての身分、栄光、契約、律法、礼拝、約束は彼らのものです。5先祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストも彼らから出られたのです。キリストは、万物の上におられる、永遠にほめたたえられる神、アーメン。

6ところで、神の言葉は決して効力を失ったわけではありません。イスラエルから出た者が皆、イスラエル人ということにはならず、7また、アブラハムの子孫だからといって、皆がその子供ということにはならない。かえって、「イサクから生まれる者が、あなたの子孫と呼ばれる。」8すなわち、肉による子供が神の子供なのではなく、約束に従って生まれる子供が、子孫と見なされるのです。9約束の言葉は、「来年の今ごろに、わたしは来る。そして、サラには男の子が生まれる」というものでした。

【福音書日課】ルカによる福音書　3章1～14節

1皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネの領主、2アンナスとカイアファとが大祭司であったとき、神の言葉が荒れ野でザカリアの子ヨハネに降った。3そこで、ヨハネはヨルダン川沿いの地方一帯に行って、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。4これは、預言者イザヤの書に書いてあるとおりである。

「荒れ野で叫ぶ者の声がする。
『主の道を整え、
その道筋をまっすぐにせよ。
5 谷はすべて埋められ、
山と丘はみな低くされる。
曲がった道はまっすぐに、
でこぼこの道は平らになり、
6 人は皆、神の救いを仰ぎ見る。』」

7そこでヨハネは、洗礼を授けてもらおうとして出て来た群衆に言った。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。8悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などという考えを起こすな。言っておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。9斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。」10そこで群衆は、「では、わたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。11ヨハネは、「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」と答えた。12徴税人も洗礼を受けるために来て、「先生、わたしたちはどうすればよいのですか」と言った。13ヨハネは、「規定以上のものは取り立てるな」と言った。14兵士も、「このわたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。ヨハネは、「だれからも金をゆすり取ったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せよ」と言った。

「聖書協会共同訳」（2018 年版）読み比べ

創世記　18章1〜15節

1主はマムレの樫の木のそばでアブラハムに現れた。昼の暑い頃のことで、彼は天幕の入り口に座っていた。2ふと目を上げると、三人の人が近くに立っていた。それを見ると、アブラハムは彼らを迎えようと天幕の入り口から走り出て、地にひれ伏して、3言った。「ご主人様、もしよろしければ、どうか僕のところを通り過ぎて行かないでください。4水を少しばかり持って来させますから、足を洗って、木陰でお休みください。5またパンを幾らか持って来ますので、元気をつけ、それからお出かけください。せっかく僕の近くを通られたのですから。」すると、彼らは「分かりました。それではあなたの言うとおりにしてください」と答えた。6アブラハムは天幕のサラのところに急いで戻り、「急いで、上質の小麦粉を三セアこねて、パン菓子を作りなさい」と言った。7またアブラハムは牛の群れのところへ走って行き、柔らかくておいしそうな子牛を選んで僕に渡した。僕は手早くそれを調理した。8アブラハムは凝乳と乳、そして調理された子牛を運んで来て、彼らの前に出した。木陰で彼らが食事をしている間、彼はそばで給仕をした。

9彼らはアブラハムに「あなたの妻のサラはどこですか」と尋ねた。アブラハムが「その天幕の中にいます」と答えると、10彼らの一人が言った。「私は必ず来年の今頃、あなたのところに戻って来ます。その時、あなたの妻のサラには男の子が生まれているでしょう。」サラは、その人の後ろにある天幕の入り口で聞いていた。11アブラハムとサラは多くの日を重ねて年を取り、サラには月経がなくなっていた。12サラは心の中で笑って言った。「老いてしまった私に喜びなどあるだろうか。主人も年を取っているのに。」13主はアブラハムに言われた。「どうしてサラは、自分は年を取っているのに本当に子どもを産むことなどできるのか、と言って笑ったのか。14主にとって不可能なことがあろうか。私があなたのところに戻って来る来年の今頃には、サラに男の子が生まれている。」15サラは怖くなり、打ち消して言った。「いえ、私は笑っていません。」主は言われた。「いや、あなたは確かに笑った。」

ローマの信徒への手紙　9章1〜9節

1私はキリストにあって真実を語り、偽りは言いません。私の良心も聖霊によって証ししているとおり、2私には深い悲しみがあり、心には絶え間ない痛みがあります。3私自身、きょうだいたち、つまり肉による同胞のためなら、キリストから離され、呪われた者となってもよいとさえ思っています。4彼らはイスラエル人です。*子〔直訳→養子〕*としての身分、栄光、契約、律法、礼拝、約束は彼らのものです。5先祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストも彼らから出られたのです。*キリストは万物の上におられる方。神は永遠にほめたたえられる方〔別訳→キリストは、万物の上におられる、永遠にほめたたえられる神／万物の上にいます神は、永遠にほめたたえられますように〕、アーメン。*

6しかし、神の言葉が無効になったわけではありません。実際、イスラエルから出た者がすべてイスラエルなのではなく、7アブラハムの子孫がすべてその子どもというわけでもありません。かえって、「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれる。」8すなわち、肉による子どもが神の子どもではなく、約束による子どもが子孫に数えられるのです。9約束の言葉は、「来年の今頃、私は来る。そして、サラには男の子が生まれる」というものでした。

ルカによる福音書　3章1〜14節

1皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネの領主、2アンナスとカイアファが大祭司であったとき、神の言葉が荒れ野でザカリアの子ヨハネに臨んだ。3ヨハネはヨルダン川沿いの地方一帯に行って、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。4これは、預言者イザヤの書に書いてあるとおりである。

「荒れ野で叫ぶ者の声がする。
『主の道を備えよ
その道筋をまっすぐにせよ。
5 谷はすべて埋められ
山と丘はみな低くされる。
曲がった道はまっすぐに
でこぼこの道は平らになり
6 人は皆、神の救いを見る。』」

7そこでヨハネは、洗礼を授けてもらおうとして出て来た群衆に言った。「*毒蛇〔クサリヘビ〕*の子らよ、差し迫った*神の〔←補足〕*怒りを免れると、誰が教えたのか。8それなら、悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などという考えを起こすな。言っておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。9斧はすでに木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒され、火に投げ込まれる。」10群衆は、「では、私たちはどうすればよいのですか」と尋ねた。11ヨハネは、「下着を二枚持っている者は、持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」と答えた。12徴税人も洗礼を受けるために来て、「先生、私たちはどうすればよいのですか」と言った。13ヨハネは、「規定以上のものは取り立てるな」と言った。14兵士も、「この私たちはどうすればよいのですか」と言った。ヨハネは、「誰からも金をゆすったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せよ」と言った。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・11 月 8 日「降誕前節第 7 主日」の日課主題は「神の民の選び(アブラハム)」。
・旧約日課は、「創世記」から、アブラハムが三人の客人を迎えた逸話伝承の箇所。使徒書日課は、『ローマの信徒への手紙』から、イスラエルの救いの問題について論じ始める箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、洗礼者ヨハネを紹介する箇所。

旧約日課(創世記 18 章より)

・「創世記」は、ユダヤ教正典(ヘブライ語聖書)の区分で「律法(トーラー)」の第一巻に置かれた伝承物語文書。一般に、「原初の物語」(1～11 章)と「族長たちの物語」(12～50 章)に分けて扱われるが、両者は「系図(トーレドート)」の形式によって連続したものとされている。
・日課箇所は、「族長たちの物語」の前半部(12～25 章)を占める「アブラハム物語」の中に置かれた伝承説話で、アブラハムが三人の見知らぬ旅人を迎えてもてなしたところ、妻サラに息子イサクの誕生を告げられたという逸話。アブラハムは、実子を得ぬまま主の言葉を聞いて 75 歳で故郷を離れたが、その際、甥ロトを伴っていた(12 章)。明言されていないが、跡取りのための養子としていたと示唆される。ところが、そのロトが別の道を行くことになり(13 章)、アブラハムは、代わりに家の僕エリエゼルを跡継ぎにすることにしたのだが、ある日、主から「実子が後を継ぐ」との御告げとともに契約関係を告げられる(15 章)。アブラハムとサラ夫妻は、二人とも高齢だったため、サラの身の回りの世話をしていた女奴隷ハガルを代理母としてイシュマエルをもうけるが、サラとハガルの諍いによりイシュマエルの扱いが定まらないこととなった(16 章)。それに対して、主はアブラハムに対して、彼がサラによって実子を得るとの約束を告げられ、その名を「イサク」とすべきこと、また、契約のしるしとして「割礼」を受けるべきことを命じられた(17 章)。日課箇所は、同じ内容の「イサク誕生」の御告げが、サラに対して、見知らぬ旅人の姿を取った主により告げられた、という内容で展開している。
・この逸話は、「イサク」の名が「笑う」を意味する語から取られたことを説明する命名譚として構成されており、物語中でサラが「笑った」こと、またそのことを指摘されたサラが否定したことが、主要な展開要素となっている。前章(17 章)でアブラハムに対して同じことが告げられた逸話にも、アブラハムが「笑った」(18:17)ことを契機に「イサク」の名が与えられたとの命名譚が含まれているが、日課箇所は逸話自体が命名譚として完結している。
・「マムレの樫の木の所」は、アブラハム(アブラム)が寄留した拠点として 14:18 以降、繰り返し場面設定される地。ユダ族と関係の深い「ヘブロン」にある。
・日課箇所の三人の旅人は、東方教会の伝統で「至聖三者」と呼ばれ、「三位一体」の予型と解される。

使徒書日課(ローマ 9 章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。パウロが未訪のローマ教会共同体に宛てて記した書簡で、彼のローマ訪問計画とその後のエスパニア伝道計画をあらかじめ伝え、受け入れてもらうために記したものと解される。パウロとローマ教会の人々の一部は、「コリントの教会形成」(使徒 18 章)に共に携わることですでに交流を持っていたが、パウロが「コリント滞在」以前にバルナバらの宣教団から離脱して独自の宣教団を組織してマケドニア伝道などの活動をしていた時期のことを知る者たちは、彼の福音理解に対する疑念を残していたと推認される。その疑念を払拭するために、パウロは、本書簡で紙面を割いて自身の福音理解を示し、「ガラテヤ書」で主張したような原理主義的で排他的な福音理解ではなく、ペトロら使徒たちの宣教とも一致できる包摂的で普遍性の高い福音理解に立っていることを伝えようとした、と考えられる。
・日課箇所は、8 章までででキリストの福音により異邦人も救いに入れられて「神の子」とみなされるようになるという救済理解を述べてきたことを踏まえて、あらためて、キリストの福音を受け入れないでいる「イスラエル」の救いに関する問題が取り上げられる部分(9～11 章)の導入部分。パウロは本書中、1～3 章で繰り返し「ユダヤ人」を取り上げているが、その文脈の中では「イスラエル」の用語を用いていない。ところが、9～11 章では、もっぱら「イスラエル」の用語を用いて、一部で「ユダヤ人」の用語を用いる、という用法を取っている。他の書簡も含めたパウロの両語の用法では、彼と同時代に生きて独自の宗教的共同体社会を構成している集団に属する者たちを「ユダヤ人」と呼び、「(旧約)聖書」が物語る歴史の中に描かれる概念としての「神の民」を「イスラエル」と呼ぶ傾向にある。つまり、「ユダヤ人」を用いて論じるところでの彼の関心は、現にローマ社会の一部を構成している「ユダヤ人社会共同体」の社会学的側面に関心が向けられているのに対して、「イスラエル」を用いる際の関心は、『聖書』が描く「救済共同体としての神の民」の歴史神学的側面に関心が向けられている、と見ることができる。
・日課箇所で取り上げられる「アブラハムの子(孫)」という表現も、「福音書」でしばしば触れられるように当時のユダヤ人社会の中で頻繁に用いられていたものだが、パウロはもっぱら「イスラエル」という歴史神学的概念に関連して取り上げていると考えられる。この「アブラハムの子孫」を『聖書』に基づいて神学的に解釈するために、パウロは、アブラハムの二人の実子(イシュマエルとイサク)の誕生説話を取り上げている。同様の取り上げ方を「ガラテヤ書」にも見ることができるが(ガラ 4:21~31)、そこでの論考を日課箇所では明らかに修正しており、両論考を整合させることはできない。

福音書日課（ルカ 3 章より）

・日課箇所は、洗礼者ヨハネを紹介する箇所（3:1～20）の一部で、四福音書が共通して伝えているが、各福音書で独自の視点から描かれている（比較表を参照）。「ルカ」は、はじめに皇帝の治世など世界史的状況を背景として示してから登場させることで、洗礼者ヨハネという存在の歴史的意義を強調しようとしていると見ることができる。同様の手法は、主イエスの誕生場面（2 章）や「使徒言行録」の諸場面にも見出される。

・「皇帝ティベリウスの治世の第十五年」は、紀元 28 年と考えられる。ティベリウス（治世＝後 14～37 年）は、初代皇帝アウグストゥスの継子で養子として帝位を継承した第二代皇帝。彼は、紀元 27 年以降、都ローマを離れて南部の小島カプリ島での半隠棲生活に入り、そこから統治を続けた。ローマにおける政治闘争から距離を置くためだったとされるが、もともと実務家肌の人物であったと伝えられている。

・「ガリラヤの領主」として紹介される「ヘロデ」は、ヘロデ大王の子ヘロデ・アンティパスで、ガリラヤ湖畔に皇帝ティベリウスの名を冠した都市「ティベリアス」を建設したことでも知られる。「その兄弟フィリポ（フィリッポス）」のほかに、「イドマヤ、ユダヤ、サマリアの領主」となった「アルケラオス」および彼らの妹「サロメ」の四人が父ヘロデ大王の領地を四分割して継承していた。ただし、「アルケラオス」は早くにローマ元老院によって解任され、彼の統治していた領地（イドマヤ、ユダヤ、サマリア）はローマ直轄地として総督の支配下に置かれるようになった。

・7 節以下は、洗礼者ヨハネの宣教内容を具体的に伝える描写となっている。四福音書は、ヨハネが主イエスとの関係を自ら語ったとされる言説は共通して伝えているが、その宣教内容を具体的に伝えているのは、「マタイ」と「ルカ」のみで、「ルカ」がより充実した内容で伝えている。四福音書は、共通してヨハネを主イエスの不可欠な先駆者と位置づけて両者の連続性を明示しながら、その差異を確かめるという形で伝えている。「ルカ」は、ヨハネの宣教使信の中心が「悔い改め」であったことを強調し、そのしるしとして授けていた「水の洗礼」についても「悔い改めの洗礼」と位置づけることで、主イエスの弟子たちが継承した「聖霊（と火）の洗礼」と区別しようとしている。

・8 節「神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる」の句は、「マタイ」も並行箇所で伝えている（マタイ 3:9）。「マタイ」は、福音書の標題を「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」（マタイ 1:1）としており、「アブラハムの子」としての主イエスに関心がある。他方、「ルカ」は、「ザアカイ」の逸話中の「この人もアブラハムの子なのだから」（19:9）という句が示すように、神の恵みにより選ばれているすべての者に関心がある。

来週の誕生日 （11 月 8 日～14 日）

主日礼拝の讃美歌から

・21-227「主の真理は」（＝Ⅰ-85 番「主のまことは」）は、明治初期の日本人作（国学を学び半キリスト教の意図で教会に潜入した結果信仰を持ち、キリスト教学校で教えながら讃美歌集編纂に携わった松山高吉と推定）の歌詞が原詞。1903 年版『讃美歌』以来、ユダヤ教聖歌の曲と組み合わされた。

・21-451「くすしきみ恵み」（＝Ⅱ167「われをもすくいし」）は、ゴスペルソング「アメージング・グレース」で知られる。作詞は、奴隷船船員として働いていた際に遭遇した暴風雨の中で回心し英国教会の司祭となったジョン・ニュートン。ウェスレー兄弟に続く世代。曲は、19 世紀初頭から米国南部で歌われていた民謡が原曲。

・21-458「信仰こそ旅路を」（＝Ⅰ270）は、19 世紀英国の会衆派教会牧師トーマス・リンチが自ら編集出版した歌集で発表、後に会衆派の讃美歌集にも収録されたが、1970 年代以降の英語讃美歌集で採用しているのは米国合同教会の讃美歌集（NCH）のみ。曲は、スイス民謡ともされるが、詳細不明。

21-451「くすしきみ恵み」＝Ⅱ-167

Amazing Grace! How Sweet the Sound

1. Amazing grace--how sweet the sound-- / That saved a wretch like me! / I once was lost but now am found, / Was blind, but now I see!
2. The Lord has promised good to me, / His Word my hope secures; / He will my shield and portion be / As long as life endures.
3. Through many dangers, toils and snares, / I have already come; / His grace has brought me safe thus far, / His grace will lead me home.
4. Yes, when this flesh and heart shall fail / And mortal life shall cease, / Amazing grace shall then prevail / In heaven's joy and peace.
5. When we've been there ten thousand years, / Bright shining as the sun, / We've no less days to sing God's praise / Than when we'd first begun.

21-458「信仰こそ旅路を」＝Ⅰ270

My Faith, It is an Oaken Staff

1 My faith, it is an oaken staff, / The trav'ler's well-loved aid; / My faith, it is a weapon stout, / The soldier's trusty blade. / I'll travel on, and still be stirred / By silent thought or social word; / By all my perils undeterred, / A soldier pilgrim staid.

2 I have a guide, and in His steps / When travelers have trod, / Whether beneath was flinty rock / Or yielding grassy sod, / They cared not, but with force unspent, / Unmoved by pain, they onward went, / Unstayed by pleasures, still they bent / Their zealous course to God.

3 My faith, it is an oaken staff, / O let me on it lean! / My faith, it is a trusty sword, / May falsehood find it keen! / Thy Spirit, Lord, to me impart, / O make me what Thou ever art, / Of patient and courageous heart, / As all true saints have been.